



TITLE:

人文 第25号

AUTHOR(S):

CITATION:

人文 第25号. 人文 1982, 25: 1-37

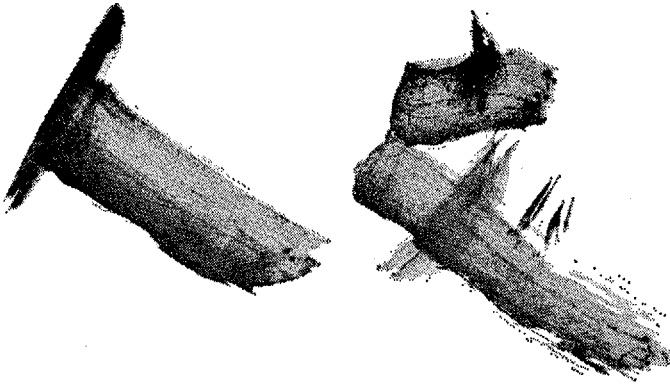
ISSUE DATE:

1982

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/57151>

RIGHT:



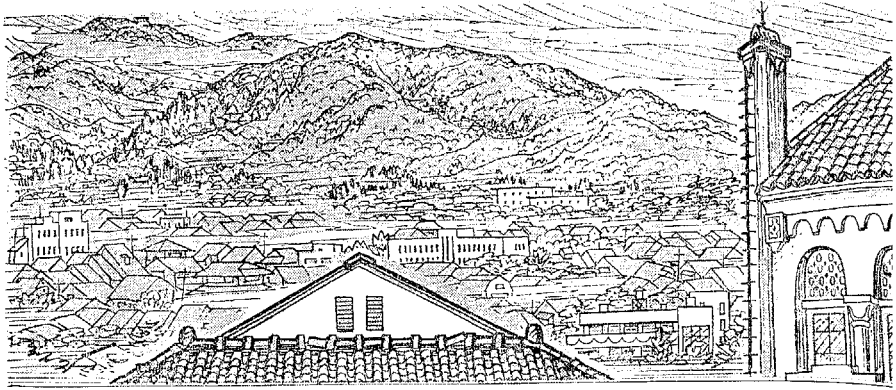
第二五号



1982

京都大学人文科学研究所

ISSN 0389-147X



人 文 第二五号

1981年6月——1981年11月

も く じ

随 想

漢語文献の索引と引き方について
見えざるカンニング

荒井 健
浅田 彰

2

講 演

夏期講座

工業化発展における中心国と周辺国
雲夢出土秦律と秦の地方統治
明治国家における地方編成
黄庭経と大洞経
粘土板契形文書の所立と伝播
ヨーロッパの「僻地」ブルターニュ

山本 有造
江村 治樹
古屋 哲夫
表谷 邦夫
前川 和也
多田道太郎

開所記念講演

ふたつのチャガタイ家
ヨーロッパの土俗信仰
節用集と日本文明

杉山 正明
山下 正男
横山 俊夫

本のうわさ

竹内実『魯迅周辺』（宇佐見・辛島・桑山・小西・山崎『インダス文明』（山下・渡辺徹『一九三〇年代日本共産主義運動論』（狭間・山下正男『思想の中の教会的構造』（横山・多田道太郎『本棚の風景』（平田）

18

共同研究の話題

中国の貴族社会

川勝 義雄

24

七年目
三年間をふりかえって

湯浅 康正
永井 和

27

旅

スイスのフランス語（御牧）・旅の楽しみ（田中）・粮票（富谷）・インカの都で（羽賀）

書いたもの一覧

人のうごき（17）・カットについて（17）・おくりもの（23）・訃報（23）・外国人研究員、招へい外国人学者、外国人共同研究者、外国人研修員（23）・感銘をうけた本（31）・講演会（31）・お客さん（32）

34

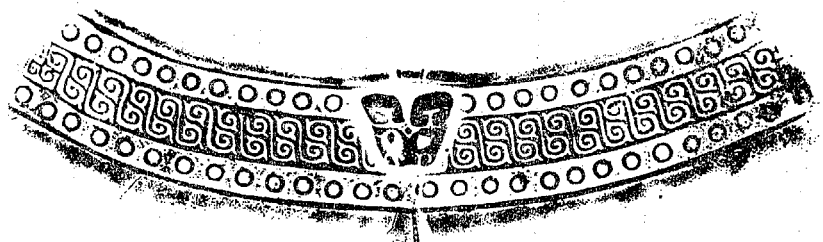
漢語文献の索引と引き方について

荒井 健

多少とも文献しらべをやった人間なら、索引の便利さはだれでも知っている。しかし索引自体が容易に引けるのでなくては、ねうちはぐっとすれる。そこで索引語彙排列に工夫がいる。カナモジ・ヨコモジはいいが、問題は漢字語彙のばあいだ。

いま現に使用されている排列法はといえば、(一)字形方式で、(1)総画、(2)部首、(3)四角號碼。(二)字音方式で、(4)注音符号(ㄅㄆㄇㄌ)、(5)拼音文字、(6)ウェード式、(7)日本漢字音、と代表的なものだけでざっと七種類。まさに天下大乱の時代だ。それでも総画びきがやはり最も一般的だと思われるが、これほど面倒な、チエのない方式はあるまい。部首びきがまだしもだが、不便さは本質的には同じだ。しかし語彙が人名・書名など固有名詞にかぎられておれば、不便さをかこつただけですむ。ところが、普通名詞はむろんその他万般のことば、文学語学関係語彙の索引となると、どうしても(二)の字音方式によらねば合理的ではない。漢字には音通・音転の現象があるからだ。

一例をあげよう。元氣ハツラツのハツラツということばであ



る。もともになった漢語では、現代日本語の用法とやや異り、弓をキリキリと引きしほり、魚がピンピンと跳ね、鳥がパツと飛び立つ等、強い張りのある音を示すオノマトペなので、ハツ・ラツの二字を一種の表音文字とみなすこともできる。従って同音または近似音のさまざまな文字が用いられ、語形は澁刺、撥刺、躍刺、抜刺、跋刺と多様に変化するが、語義は不変である。これら一類の語彙は、できるかぎり連続ないし接近して排列されるのが望ましい。その点で字形式排列法はまず落第だ。字音式のなかでは、漢語の音韻体系を忠実に反映させた注音符号方式が理想的ではあるが、過去のものとなりつつある覚えにくいこの符号などという向きもある。ウェード式にも似たようなことがいえる。現代中国のローマ字たる拼音方式は案外ぐあいが悪く、跋 (ba) と澁 (po) のように B と P、有気音と無気音の排列の分離は致命的である。

ここまでいえば、今の我々にとって最も実用的かつ学問的な漢字語彙排列法が何かは一目瞭然であろう。遠慮せずに五十音方式を利用すればよいのだ。アイウエオ順のごとき世界に通用せぬ閉鎖的なやり方なぞ、もってのほか、とお叱りを受けるかもしれないが、筆者はそうは思わない。日本の専門家は常に外を向いて奉仕せずともよからう。索引はしょせん能率至上主義の産物で、今の我々の使い勝手を考えるだけで十分。それに電算機の導入で、索引自体の将来がどうなることやら。



見えざるカンニング

浅田 彰

大学入試受験後七年目にして共通一次試験監督なるものを仰せつかる羽目となった。ついこのあいだまで試験を受ける立場にあったのだから大変な急転回だ。これまで一応被害者側だったのが、今度ははっきりと加害者側に立ったわけである。

とはいえ、大学入学後に受けた試験は良かれ悪しかれ随分いい加減なもので、被害者というほどのこともなかった、というのが実情だろう。また、この頃の学生は全然面白くない、マジメに授業に出てマジメに勉強し、小金を貯めるようにして単位を集める、ケシカラン、という声をよくきくが、少なくともぼくの周囲にはそういう「不埒者」はあまりいなかった。むしろ、問題は、いかにして最小の努力で単位をかすめとるか、ということだったし、また実際、この単位というヤツが実に簡単にかすめとれたのである。

この「いかにして」という中にカンニングも入っていることは言うまでもない。ただ、「目的のためには手段を選ばず」というのとはちょっと違った空気がそこにはあった。何をするにもそれなりのスタイルとスキルがあることを認識し一定のレベ



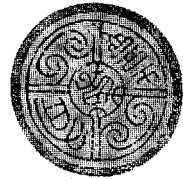
ルを守ることをもって倫理というならば、その空気をカンニングの倫理と呼ぶこともできよう。残念ながら、そのような倫理意識はすでに薄れつつあった。なりふり構わぬカンニングの例が増え、縮小コピーへの依存にみられるような技術Vによる△技能Vの駆逐がそれに拍車をかけた。それでも、試験場は一定の倫理を前提とした受験者と監督との虚々実々のゲームの場であり続けた。

そんな余裕がひとかけらもないのが共通一次の試験場である。確かにぼくたちはそこで監督をするのだけれども、そもそも試験の性質自体がカンニングの余地を殆ど残していないように思われる。いや、むしろ、丸暗記で試験を受けるのは頭の中にカンニングペーパーをもっているようなものだと言破した森一刀斎にならって言えば、全員がきちんと規格化された不可視のカンニングペーパーをもっている以上いままら他のカンニングなどする必要がないのだ、と言う方が正確だろう。彼らがそこに書かれた情報をマークシートに移しかえている間、ぼくたちはこの見えざるカンニングの進行を監督し続けているわけだ。

思わず肩をすくめたぼくに、利発そうな男の子が視線を向けた。その顔に、ぼくはシニカルな共犯者の笑いを見た。



講演



夏期講座（昭和五十六年度）

△中央と地方▽

五十六年八月一日—三日
於 本館會議室

工業化発展における 中心国と周辺国

山 本 有 造

一八世紀末にはじまり今日につづく新しい経済的エポックを、われわれはS・クヅネットにならって「近代的経済成長（Modern Economic Growth）」と呼ぶ。それは、科学的知識を生産に応用するという、近代的

インダストリアル・システムの普及を通じて、人類に新しい時代を画したのであった。ホブスボームのいうように、「一七八〇年代のある時に、人類史上はじめて生産力にたいするかせが取除かれ、それ以後、ヒトとモノとサービスは、不断かつ急速に増大することが可能になった」のである。

しかし同時にわれわれは、それが、人類共有の成果として享受されたのではないことに気がつかなければならぬ。クヅネットは長年にわたる綿密な研究の結果、この事実を実証的な証拠を与えた。かくも急速な二世紀にわたる経済発展にもかかわらず、今日人類の三分の二ないし五分の四がなお貧困の中に生きているのみならず、中でも貧しいアジア・アフリカの人々は、経済的にいうならば今日よりも過去の方が（少くとも相対的には）より豊かであった可能性がある。

なぜ一方において、イギリス—西欧諸国—西欧系の海外派生国において経済発展の始発および普及が成功し、なぜ他方においてこれに成功しなかった多くの人々多くの国々があったのか、われわれはこれを、まず、革新（Innovation）の始発と伝播をめぐる三つの側面から観察することができる。(1) 外生的な新機会にたいして自らの技術的ポトルネックを熟知し、それにチャレンジする能力をもつこと。しかしそのために

は、十分な社会的エネルギーを集中せしめうるような(2)制度的、および(3)イデオロギー的構造をもつこと。

しかし以上の一般的考察に加えて、われわれはもうひとつ、時間の要素をとり入れなければならない。経済史に即して具体的にいえば、いわゆる「帝国主義」と一般によばれる問題にはかならない。先進国と後進国は、往々にして、近代対前近代としてとらえられやすい。しかし、一八七〇年代以降まさにグローバルなものとしてその姿を明確にする世界経済の多重的構造の下にあっては、植民地的後進国の存在そのものが、イギリスおよび諸列強の経済を支えたのであり、その意味において、前近代の後進経済は、近代的創造物にほかならなかったのである。

雲夢出土秦律と秦の地方統治

江 村 治 樹

郡県制は、秦が中国全土にそれを施行して以来、基本的に清末まで一貫した地方統治の方式でありつづ

けたといつてよい。そして、それは皇帝を頂点とする官僚制と密接に関連しつつ、中国史を大きく特色づけるものとなっているのである。

近年、このような郡県制の形成過程を考える上で、格好の材料として、湖北省雲夢縣睡虎地の秦墓から大量の竹簡が出土した。その内容は、南郡（竹簡出土地はその範圍内）治下の県の官吏と考えられる被葬者の経歴を記した一種の年譜、南郡太守が下県の官吏教戒のために発布した文書、秦律（「秦律十八種」「效律」「秦律雜抄」の三種に分類されている）、律文の解釈書、裁判文書の書式や案件例集、官吏の心得を記した書物および卜巫関係の書物など多岐にわたっている。

このうち、とくに秦の地方統治の方式を考える上で重要なものは秦律である。うち、「效律」には県、都官の物品検査に関する律の集録であることが表記されていたが、「秦律十八種」の方は、従来、単に被葬者が全秦律中より私的な必要から抄写したものともみなされていただけで、その性格は不明確であった。しかし、その内容を仔細にみると、全体に一つのまとまりがあり、これも「效律」と同様、県、都官の管理規定を集録した一つの書物とみてよいのではないかと考えられる。これを内容から整理してみると、物品、労役、倉庫に関する律文に管理規定として一貫性があ

り、工、錢布、農牧に関する規定は非常に断片的である。したがって、前者の部分は、ある一官府内の管理を遂行するために集録された律文であり、後者はその官府に關係する限りにおいて集録された律文と考えられる。

ところで、その集録の目的は、出土地や被葬者の身分などから考えて、地方の郡県、具体的には南郡治下の県で適用するためであると考えられる。しかし、その律文中には中央の官府と考えられる都官の律、あるいは秦の本拠地である内史治下の県の律などが含まれており、これらが無条件に南郡治下の県に適用されたとは考えられない。戦国時代、郡には他国の侵略に備える特別軍政施行地域としての性格があったとされることを考え合せれば、秦の地方の郡県は、法律適用に關してある程度の裁量権を有しており、制度的に中央からの独立性が保証されていた存在ではなかったかと考えられる。そして、このようなその形成事情と密接に關わる郡県の制度的自律性は、後の官僚の性格をも大きく規定していくものと考えられる。



明治国家における地方の編成

古 屋 哲 夫

同じ文字を使ってもその意味内容が時代によって異ってくる例は多いが、「地方」の場合にも、これが「ちほう」と読まれるようになるのは明治以後のことであり、それ以前の読み方は「じかた」であった。そしてこの「じかた」とは、それが江戸時代を通じて次第に「村方」という言葉におきかえられていったことにもあらわれているように、貢租の負担単位であり基礎秩序である「村」の維持をめぐるさまざまな問題を包括する言葉として使われていた。従って幕藩体制に代る新しい国家を生み出すためには、「じかた」支配の再編成が必要であり、そこに「ちほう」の問題が登場することとなった。

明治政府は、まずこれまでの領主Ⅱ「じかた」關係を否定するとともに、その總体を「ちほう」として国家権力の下部にとり込もうという形でこの問題に手を

つけてきた。「ちほう」という呼び方の最初の用例は「地方官」であるが、それは村における知府事、藩における諸侯、県における知県事を指すものであった。この政策は具体的には旧来の幕藩機構に介入してその画一化を促し、その人事を掌握することによって、その機構を内部より再編するという形で展開されているが、これに対して「じかた」に対する政策は従来の村落機構の外側に新たな機構をつくり出そうとした点で特徴的であった。

それは旧来の身分別戸籍を打破して地域別戸籍をつくり、人民を直接的に把握しようとする点から出発しているが、同時に戸籍の調査・編成のための「区」を設置し、これを次第に行政事務全般を扱う機構に強化してゆくのであり（大区小区制）、いわば「じかた」機構の全面的否定を意図するものと云えた。しかし学校・徴兵・衛生など旧幕時代にみられなかった新しい要求の実現をはかろうとすれば、公的にはその存在を否定した「村」の結合に結局は依拠せざるを得ず、いわば「ちほう」化政策は「じかた」の壁にはねかえされて一定修正を余儀なくされたと云えよう。そしてその結果、町村を復活させ町村会―郡会―府県会という形で旧村時代の「寄合」機能を吸収する代りに、郡という人為的中間機構を設定し、また選挙権の納税資格

によって人民を階層的に分断することによって政治的安定をはかろうとする新たな政策が打出されることになった。それは一見地主制的秩序とも云えたが、しかし「じかた」に代る「ちほう」形成の核は、地主経営の利害そのものよりも、地主の投資能力を、さまざまな開発計画をもち出すことによって、殖産興業―地方産業育成の方向に誘い出すことができるか否かにかかっていたように思われる。

黄庭経と大洞経

―道教における体内神と

内観について―

麦谷 邦夫

五世紀末、梁の陶弘景によつて大成された上清派（茅山派）道教の根本經典に、『黄庭経』と『大洞経』とがある。

『黄庭経』には、王羲之の書蹟で名高い『黄庭外景経』と、上清派の道士達が東晉後半期に『外景経』をもとに作成し、より宗教的価値が高いといふ意味で

『黃庭內景經』と命名したものの二種類のテキストが現存する。ここでは『内景經』を主として取上げるが、『内景經』を支へる基本的思想は概略次のやうなものである。

人間の肉体は、天上の神々の世界と対応する一個の完結した神々の世界であり、身体諸器官は全て神々の宿る宮殿樓閣であつて、人間の生命活動はこれら諸神の統括下にある。人は宇宙の元気を体内に取込んで限なく循環させる服氣の法と、体内諸神とその宮域を觀想する内觀存思の法とによつて、神々と直接交感し彼らとの一体性を確立して生命活動を完全に調和させるならば、不老長生を達成し、最終的には肉体を保持したままの自己を神的存在へと転化させることができる。

かくて『内景經』は、五藏神を中心とする体内諸神の名字服色を列挙し、黃庭（脾臟）を初めとする神々の居処（身体器官）を宗教的譬喩を用ゐて描写し、三十六章からなるこの經を誦読することによつて神仙へと昇化しうることを説く。そして『内景經』の説く道教的身体論を根柢にあつて支へてゐるのは、『黃帝經』を初めとする漢代医書等に見られる古代医学理論であり、換言すれば、中国古代医学を五藏神説を核に宗教的に展開させたのが『内景經』であると言へよう。

一方『大洞經』（正確には『大洞真經三十九章』）は、

『黃庭內景經』の基本構造をそのまま繼承したうへで、泥丸九宮説や三元三一説などを加へてより宗教的神秘的な体内神説を展開させたものである。と同時に『黃庭內景經』には見られなかつた死者（先祖）の救済を明確に説いてをり、思想史的展開の迹がはつきり看取される。

葛洪『抱朴子内篇』に集大成された金丹至上主義の神仙術的道教のもつ閉鎖性、方法論的繁雜さを超克し、単なる呪術ではなく知識人にも受入れられる理論的根柢をもつより簡便な方法論に立脚した、開放的な道教教理の形成を目指してゐた東晋後半期の上清派道教の担ひ手たちが、この目的実現のために最初に作成したのが『黃庭內景經』であり、次いでより高度の宗教性を附与して完成したのが『大洞真經』であつた。

粘土板楔形文書の成立と伝播

前 川 和 也

現在知られている最古のシュメール粘土板文書は、

最南部のウルクから出土している（ウルクⅡa層、前四千年紀後半）。つづいて前三〇〇〇年頃のジャムデト・ナスルからも「古拙的」な粘土板群があらわれる。これらのテキストの大部分は、神殿ないし王宮の行政・管理記録であり、後代の諸遺跡から出土する無数のシュメール行政・経済文書の祖型とみなすことができる。けれども、一九六〇年代後半にいたるまで、ウルクおよびジャムデト・ナスル「古拙」文書の研究はさほど進まなかった。文字の大部分が表意的な絵文字として用いられているから、表意文字から表音文字へとという展開を重視する西欧の研究者には、ウルク、ジャムデト・ナスル両文書はいかにもプリミティヴにみえるのかもしれない。

けれども最近、これら「古拙」文書的重要性があらためてみなおされるようになってきた。たとえば、王宮ないし神殿内の職業リストなど書記養成のための教材がこれらの文書のなかに含まれていて、しかもこれらのリストは前二千年紀前半にいたるまで各地で延々と書き続けられていたことがしだいに明らかになりつつある。両河地方だけでなく、イランのササ、シリアのエブラ（アレppo近郊）からも出土しているのである。とりわけ特筆すべきは、前三千年紀後半のエブラから、これらのリストだけでなく、大部分の術語がシ

ュメール語で書かれている大量の行政・経済文書がいきん出土したことである。前三千年紀はじめにはメソポタミア南部の一都市（おそらくキシュ）がシュメール書法の一大センターであり、ここで成立したシュメール語書法がとくくシリアのエブラにまで伝播したという仮説が成り立つであろう。ここでわれわれは、シュメール「古拙」文書で表意文字が用いられていることの意義を、より積極的に評価すべきである。エブラ人は、かれらの行政記録におけるシュメール表意文字をシュメール語ではなく、北西セム系エブラ語で読んでいたのである。つまり、シュメール文字が表意的であるが故に、他民族は行政記録のための文字としてかえって容易に採用できたのかもしれないのである。また、シュメール「古拙」文書で使われている文字が表意的、絵文字的であるからという理由で、当時のシュメール社会をプリミティヴとみなすことはできないことを、漢字文化の成立と伝播の事情を知っているわれわれは、よく納得できるであろう。



ヨーロッパの

“僻地”ブルターニュ

多田 道太郎

地方のことを地方（じかた）と呼んでいた時代に存在した「地方」は、今の日本には見当らない。一種の都会化は、地方においてこそ目ざましいからである。ブルターニュは地方（じかた）である。都会化に抵抗し、近代化一般に抵抗している。

一九六七年の調査のとき、私は日本の絵ハガキを持って行った。一つは大阪の中心ビル街の写真であり、もう一つは能登半島の絵ハガキであった。ブルターニュの農漁民は、大阪の風景には何の興味も示さなかった。ところが、能登半島の風景には、ひどく心をそそられたようであった。「ほう、日本にもこんな文化の地方があるのですか。」都会化、近代化とは反対の方向を目ざすことが、彼らの「文化」である——と知った。

能登と大阪との相違には目をつぶって、一口に「日本」というならば、日本とブルターニュは、一つの共

通点と、一つの相違点とがある。共通点は、古いものの保持である。ブルターニュにはケルトの伝説がある。いや、ケルト以前の伝説さえ、村の慣習としてのこっている。たとえば、村の中心に泉がある。今は、キリスト教の聖者がまつられている。むかしはケルトの聖者、ドリュイド教の聖者がまつられていた。泉は生命の中心である。キリスト教がこれを「乗っ取った」のである。しかし、今もここへ目を洗いに来る素朴な人びとは、乗っ取ったキリスト教を信じるふりをしながら、じつはその背後にある、もっと原始的な信仰につながっている。

キリスト教、ケルト文化、ケルト以前の古い信仰、これらが層をなして積みかさなっている。イギリスにもメンヒルはあるが、ブルターニュのメンヒルはみごとである。ちかごろ、民俗学の方から仮説が出て、メンヒルは死者の「よりしろ」であるとされた。死者はここを仮りのやどりとして、よみがえりを待つのである。不妊の女性が、深夜ここにやってきて、腹をこすりつけると、「魂」を宿すことができる。日本の「よりしろ」の概念に似ている。

ここまでは似ているところ。相違点は、日本が「近代化」「都市化」に何の抵抗も感じないところである。やはり、日本の方がふしぎな国といえよう。

開所記念講演（昭和五十六年度）

五六年二月二〇日
於 本館會議室

ふたつのチャガタイ家

杉山 正明

中国甘肅省、肅州酒泉の西南郊外に文殊山の名で呼ばれる三百窟ばかりの石窟寺院群がある。その中心となる一窟、文殊寺に立つ「重修文殊寺碑」のなかで、チュベイ一族の当主ノムータシユなる人物は、みずからの家系をチャガタイ家正統と誇らかに称している。時に、西暦一三二六年。通念では、「チャガタイハン国」を再興したドゥア一族が、天山山中イリ湫谷を中心に、中央アジアに単独の主権を確立していた、といわれる頃である。「文殊寺碑」は、果たして何を語るのか。

この集団の祖チュベイについては、すでにポール・

ペリオがユニークな提言をしている。いわゆる「明代ハミ王家」の起源は、元時代のチュベイに遡るのではないか、というのである。元明史料をつなぐとするこの魅力的な着想に対して、我が国では、松村潤、小田寿典両氏が主に漢文史料から裏付けを試みられた。しかし、史料の不備のため、完全に立証し切るまでには至らなかった。ところが、ティムール朝シャールフ時代、ヘラートで編纂された『ムイッズルアンサーブ』なる系譜集がある。それによれば、従来不明であったチュベイ一族の系譜がはっきりと記され、ペリオ以来の懸案に完全な裏付けが得られたほか、「明代沙州衛」もまた、チュベイ一門の後身であることが判明した。そして、この系図をもとに、元明史料に散見する記事を総合していくと、十五世紀末に及ぶチュベイ家二百年の歴史が、おぼろげながらにわかってきた。では、この「もうひとつのチャガタイ家」は、どうして誕生したのか。それは、まさしく、いわゆる「カイドウの乱」の落し子であった。モンゴル帝国は、一二六〇年のクビライ登場以降、対立と分裂の時代をむかえる。その風波をもろに被ったのが、チャガタイ家であった。アルグの篡奪とその死、バラクの篡奪とその死……。帝国の動乱にストレートにつながる曲折の途を歩んだチャガタイ家は、一二七〇年代、アルグの

遺児チュベイ・カバン兄弟らの親クビライ派と、カイドウ麾下に入ったバラクの遺児ドウアラが対峙、一二七七年、この紛争に直接介入したイリの元朝進駐軍本営が突然内部崩壊するという大事件によって、カイドウ・ドウアの中央アジア支配が決定する一方、チュベイ・カバン兄弟は、後退する元朝勢力とともに一族軍団を引きつれて元朝治下に来投したのである。クビライは、かつての同盟者アルグの遺児たるチュベイを、亡命チャガタイ諸集団の主帥として処遇、河西に安置して、対カイドウ戦の最前線をゆだねる。こうして十四世紀の初頭、約四十年にわたる帝国の内戦がおさまった時、「ふたつのチャガタイ家」が東西に並立する状況が生まれていたのである。

ヨーロッパの土俗信仰

山下 正男

カトリック教徒の民間的習俗として、ex votoと呼ばれるものがある。これは奉獻物と訳していいことは

であるが、語義どおりには、「誓いにもとづいて」という意味である。たとえばあるカトリック信者が大変な危難にあったとする。その場合、そうした危難を免れるために彼はマリアやその他の聖人に救いを求める。そのとき、「この危難から救っていただければ、必ずお礼を差し上げます」と約束する。そして効あって助かった場合には、「誓いにもとづいて」なにがしかの金品を教会に納めるのである。しかも自分が救われたことを広くひとびとに知ってもらうために、「絵馬」をも同時に奉納して、教会の壁に掛けてもらう。この絵馬にはふつう車から落ちて血を流している絵や、ベッドに横たわって病気で呻吟している絵などと、それに対する説明文が書きこまれている。しかしその他に、もっと即物的に、金属製や蠟製の手、足、目、耳、腹等々をも ex voto として奉獻される。これらはもちろんそうした器官の病気が治ったことに對する感謝の念を表明するためのものである。

ところでそうした現在もなおこなわれているカトリックおよびギリシア正教團の習俗は実は、エトルスキ、ギリシア、ローマの時代に遡るのであって、助けを求めたり、感謝を求めたりする神々の名こそちがうが、絵馬形式のものも、手・足形式のものも、ヨーロッパには紀元前からあったものであり、それがキ

リスト教という宗教にそのまま引き継がれたのである。さらにそうしたヨーロッパ圏の習俗と直接の継受関係はないが、中国での還願の供物という風習、日本での願ほどの捧げ物という風習はいま述べたヨーロッパの風習とよく似たものといえる。

現代ヨーロッパにおいて確かにプロテスタント圏ではそうした宗教的慣習は消失しているが、かつてはむしろ全ヨーロッパがカトリックあるいはギリシア正教圏だったのであり、そうした慣習は全ヨーロッパに存在していたといえる。そしてヨーロッパの民俗学特に宗教民俗学はそうした現象を詳しく記述したが、柳田国男もそのような業績はよく知っていて、そうしたことを日本の場合について、自分も試み、またひとにも試みることを勧めたのである。

節用集と日本文明

横山 俊夫

辞書は一国の文明の顔とよくいわれる。そこで、さ

まざまな節用集がつかわれた、室町後期から江戸末期にいたる四世紀半を、「節用集時代」と名づけ、この辞書と日本文明とのかわりについて、ガラにもなく大風呂敷をひろげてみた。

まず文明ということばについて、その起源をギリシヤ・ローマ期からあとづけ、時代ごとの意味の変化を包含するような定義をあたえた。そのさい、現在でも英語圏や仏語圏で *civisation* ということばが日常にもちいられるときには、礼譲にささえられた安定社会、というニュアンスが強い点に注目した。このような方向で文明の概念を普遍化してみると、明治の「開化」以前の社会体制をとらえる視覚は大きくかわらざるをえない。本講では日本文明を、日本のさまざまなシヴィリティ・礼譲・作法の発達、さらにより広く、ライフスタイルやもののつくりよう一般の洗練などの結果として維持されていた一箇の文化的統合体として考えた。

このような見方は、私の独断というより、一六世紀以来の多くの外国人による日本論と共通する点が多い。日本全体を「高等行儀作法学院」とみたり、日本には西洋でいう法律家が存在しないこと、宗教的に気楽であること、職人がそのわざに凝れるだけの平和があることなどに注目して、ハッピーな国だと評した人びと

は、よしあしは別として、日本文明の効率のよさというものを、無意識のうちに論じていたのである。

ところで問題は、このような省エネルギー文明をささえていたものは何か、ということになるが、教化令や教訓ものとならんで、もっともひろく庶民生活に影響をあたえていたのは、節用集類、とくに一八世紀以降の、日用百科辞書のような体裁をとりはじめた時期のものではないか、という仮説をのべた。

そこで具体的に、「節用集時代」のピークをしめすいくつかの実例、『江戸大節用海内蔵』や『大日本永代節用無尽蔵』の内容を検討した。もちろんこれらの中心部分は、かなと漢字の対照表であるが、これが日本社会のかな文化圏と漢字文化圏の間をつなぐ太い文明史的パイプの役割をはたしたに違いない。それから頭書や付録の部分も、雑多で有用な知恵を人びとにあたえ、その生活に一定の枠をはめたのである。これらのコラムが伝えた情報、およそふたつに分類できる。人びとのアイデンティティに関するものとライフスタイルに関するものである。前者では、地図、年代記、名所・名家一覧の類、後者では、衣食住の作法一般ならびに年中行事、道徳、宗教についての記述である。興味ぶかいのは、節用集でみるかぎり、日本の庶民の道徳・宗教といったものは、あれこれの教理が問題

とされたのではなく、神社・仏閣の年中行事にしたがつた生活のリズムとして、また種々の災厄をもたらすものへの礼讓としてあったということである。そして、それが一日々々まもられるかぎり、社会は年々安定していたのである。

全体としてうかがあがってきた「節用集時代」の日本文明像は、このような權威やタブーにまつわる多様なシヴィリティの集成としてのすがたであった。

さてこのような仮説を検討するためには、節用集が実際にどのようなかたちで、またどのくらいもちいられたかを知らなくてはならない。そこで現在私が京都を中心におこなっている節用集類の実態調査について報告し、不躰ながら高座より来聴諸賢の協力を求めたところ、後日いくつかの節用集を見に行くことができた。

おわりに、博文館の『伝家宝典明治節用大全』を、「節用集時代」の終焉を象徴するものとしてとりあげ、さらに現代の工業化時代の文化が、さまざまな有害物質というあたらしいタブー、厄神を蓄えはじめ、ようやくそれらにたいする礼讓というものが問われていることにふれ、新文明がはじまろうとしている予感をのべて、風呂敷をむすんだ。

人のうき

。島田慶次名誉教授（文学部）は、名誉所員（人文研）に（四月一日付）。

。平田昌司氏を助手（東方部）に採用（一〇月二日付）。

。浅田 彰氏を助手（西洋部）に採用（一〇月一六日付）。

。江村治樹助手（東方部）は名古屋大学助教授（文学部）に昇任（二月一六日付）。

。竹内実教授（東方部）は、八月二日伊丹発、台北・グラントホテル国際会議場における党史委員会等など主催の中華民国国史討論会に出席し、八月三十一日帰国。

。富谷 至助手（東方部）は、九月三日伊丹発、西北大学等で秦漢史出土文物に関する研究及び資料収集をおこない、十一月一三日帰国。

。田中峰雄助手（西洋部）は、九月一二日成田発、フランス社会科学高等研究院でフランス中世文学の社会史的研究をおこない、五七年一月一日帰国。

。鈴木祥二助手（日本部）は、九月一三日成田発、ペルーのカトリック大学で日本史編さんのための打合せ及び資料収集を終え、同月二四日帰国。

。狭間直樹助教授（東方部）は、九月二三日伊丹発、昭和五十六年度国際研究集会派遣研究員として北京、武漢、広州で辛亥革命七〇周年学術討論会に出席、中国社会科学院、北

京図書館、北京大学等で中国社会主义に関する資料収集を終え、一〇月二一日帰国。

。阪上 孝助教授（西洋部）は、日本学術振興会昭和五十六年度特定国派遣研究者として、一〇月一日成田発、パリ第三大学、ブリュッセル自由大学、マドリッド・オートノマ大学、ローザンヌ大学、ロンドン大学等でフランスにおける工業化と経済思想の研究をし、五七年五月三十一日帰国予定。

。天野史郎助手（西洋部）は、一〇月五日成田発、パリ第一大学、大英博物館、ハンブルク美術館、ローマ大学等でマルセル・ブルーストの研究及び一九世紀末ヨーロッパ美術研究をし、五八年一〇月四日帰国予定。

。松井 健助手（西洋部）は、十一月一六日成田発、カラチ、タキシラ、ペシャワル、ラホール等で急激な社会変動と伝統的部族社会の事例研究をし、五七年三月二日帰国。

随想欄のカットについて

中国の紀元前一二世紀頃のブロンズのつば形容器から採った。頸の部分に鋳出された紋様の拓本である。真中にあるのはトラを象った精霊の首。魔除けの意味をもったと想像される。その両側には小円の列で縁取られて渦巻紋が展開する。拓本で黒く出た線が紋様なのか、黒い線で囲まれた白い部分を見るべきなのか迷うが、後者が正解で、小さい枝の出たS字形の渦巻を並列した紋様なのである。

（林巳奈夫記）

本のうわさ

竹内 実『魯迅周辺』

(B6版、三一四頁、田畑書店)



魯迅の作品集を手にしたのは、もう何年まえのことになるだろうか。手当たり次第に乱読を重ねていた十代の終り頃と記憶するから、かれこれ二十年ちかくの歳月が流れたことになる。世評の高い「狂人日記」や「阿Q正伝」に中国革命前後の重くなまなましい現実を感じ受しながらも、作品としてはむしろ敬して遠ざけたいとする心の傾きを禁じ得なかった。これとは対照的に後期の短篇集、たとえば『朝花夕拾』や『故事新編』の幾篇かに、憂憤の思を抱いて修羅場をくぐり抜けて来た、ひとりのすぐれた文学者思想家の境地を瞥見する思いがして、深い感銘をうけた覚えがある。フランス近代の病める象徴の花々に心を奪われてゆく問際のことであつたから、読みの浅薄

と理解の不徹底はいたし方のないところだろう。それ以後、魯迅を改めて再読する機会はずいに訪れなかった。以下は、このような片寄った読書歴を持ち、中国の文学思想はおろかその背後にある史実にも不案内であるものの、粗雑な読後感の一端にすぎない。

読みごたえがあつたのは、やはり何と言つても本書の頁数の約半分を占める「魯迅と柔石」である。一九三一年に柔石を含む左翼作家連盟の五人の青年作家が、他の同志たちと共に上海で逮捕投獄殺害された事件に焦点を当てて、その前後における魯迅の動きを、政治と文学とのからみあいを中心にして、粘りよく精緻に追求したものである。いわゆる「左連五烈士」を「聖化」

することによって問題の所在を隠蔽してしまふ悪しき政治主義とは逆に、著者は事件にコミンテルンの介入による複雑な党内闘争が看過し得ない影を投げかけていることを可能な限りの資料を駆使して解き明かし、さらにそれが文化大革命とその後の政治文化状況にまでなまなましく尾を引いている実状を、鋭く浮き彫りにしている。

紙数の都合もあっていささか飛躍した言い方になってしまふが、ソルジェニーツィンの『収容所群島』全六巻を通読して以来、私は二十世紀の文学思想状況を概括するためのひとつの大きな指標は、政治社会における非権力の問題であることをますますよく確信するにいたつたのであるが、本書の著者が指摘する「政治と文学の關係における魯迅の正しさ」は、この問題に多大な示唆を与えてくれるもののように思われる。引用されている魯迅の詩句やことばは時として極しがたいほどの孤独とベシミズムの影を引きずっているが、権力に追従したあの老獪なゴリーキーの御都合主義とは対照的に、あくまで誠実で深く重い。

著者を監修者のひとりとして近く新訳の魯迅全集が刊行される予定と聞く。この機

縁を生かして久方ぶりに魯迅を再読することができ、今から楽しみにしている。

(宇佐見 斉)

辛島 昇、桑山正進、小西正捷、山崎元一

『インダス文明——インド文化の源流をなすもの』

(B6版、二四二頁、NHKブックス)

モエンジョ・ダールとハラッパー両遺跡の発掘は一九二〇年代の初頭の出来ごとであった。それゆえ、日本でもそうしたインダス文明についての記述は戦前の中等学校の教科書にもちゃんとでていた。しかし戦後になっても、インダス文明についての本格的な紹介書は翻訳書を除いては出なかった。日本人的手になるその種の単行書としては本書が最初である。

インダス文明の遺跡は一九二〇年代の発掘に始まり、その後なんども発掘調査が重ねられたのであり、本書はそれらの成果を最新の仕事まで浅れなく視野に入れて書かれている。ところで本書の特色は、四人の著者がその分担箇所を明示することなく刊行されたことにある。人文研の共同研究の

成果の刊行物は共同研究の成果とはいえず、大抵の場合、個人名で書かれた論文を何本か集めたものである。しかし本書は、いちおうの分担はなされたことは確かであるが、そうした分担の論文を他のメンバーを含めた徹底的な討論で書き替えを重ね、結局、あとがきのことばを借りれば「四人がすべての問題に対して共同の責任をもつような形で」つくり上げられたのである。これは数人の数学者が一人の架空の人物ブルバキーの名のもとに次々と刊行したフランスの数学書のスタイルに匹敵するものである。そしてこの試みは十分成功しているといえるのであり、そのために注ぎこまれた大きなエネルギーは読者にもよく伝わって有益な知識を提供してくれる。

考古学者桑山氏の分担は聞くとところによるとI、II、IV章の由であるが、よく彼の強味が生かされ、他方インダスの文字解読の最近の業績、つまりインダス文明の言語はドラヴィダ語である可能性が大きいとする説を適切に解説する言語学的分野の担当者と相俟って、一人ではカバーしきれないインダス文明の全貌がとらえられている。なお詳細はここで紹介できないが、インダス文明は灌漑農耕でなくて氾濫農耕によって規定されているという桑山氏の所説は大きくそう説得力に富み興味深い。

本書のもう一つのアイデアは青銅器文明の一つとしてのインダス文明の比較文明的な位置づけを、殷文明とシュメール文明との関連でおこなっていることであり、それも謙虚に、両文明の専門家である松丸道雄、前川和也両氏を招き、インダス文明研究者四氏との討論という形をとっていることである。

最後に素人の評者の苦言めいたことをいわせてもらうなら、本書の副題「インド文化の源流をなすもの」はインダス文明の現研究段階ではやや誇大の感を与える。インダス文明はインド文化にとってもはや先イ

ンド文化にすぎないものでないことは確かであるが、唯一つの源流ではなく、一つの

源流、それも伏流であるといっておくべきではなからうか。

(山下正男)

渡部徹編『一九三〇年代日本共産主義運動史論』

(A5版、二八〇頁、三一書房)

「おおよそ物はその平らかなることを得ざれば則ち鳴る」とは韓愈の名言である。明治以後の近代日本の「過程」において、戦前の共産主義運動がいわゆる「不平の鳴」の最高調の一つであったことは、十目の見るところだろう。

「社会運動の研究」班を終えるにあたって渡部さんがまとめられた本書は、四・一六後の党再建から一九三四年春の党中央の機能喪失までの時期を中心に、党とその外部団体の壊滅原因に焦点をあてた共同研究報告である。党を渡部さん、黨員、同調者の実態を西川洋氏、共青を斉藤勇氏、赤色救援会を田中真人氏、教育運動を尾崎ムゲン氏が論ずる、という構成である。

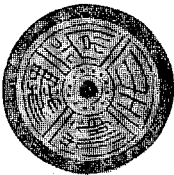
本書を読んで感ずるのは、戦前の共産主

義運動の最盛時における実勢が数量的に提示されていることに由来する一種の安心感である。長年の業績をふまえて、公刊、未公刊資料を駆使した統計により、党と外部団体の社会的輪郭が描きだされているのである。ほとんど無にちかい経営細胞の実態、二〇才代前半で入党後わずか半年ぐらいいで検査されていく黨員、共青にしる救援活動にしるそのほとんどが学生によって担われていたにすぎないこと等々。天皇制国家権力のすざまじい弾圧の対象は、数量的にはほんの小さいものでしかなかったのである。そしてまた、党勢を発展させえなかった内在的原因として、前衛党と大衆団体との混同の誤り、すなわち指導方針の根底的誤謬が指摘される。それもいくらかのバイア

スをともしないながら各団体について検討されている。その指摘は正しいだろう。しかしそこでつぎの問題が生ずる。すなわち苛酷な弾圧を覚悟しつつ、少数とはいえ何百何千の有為の青年学生がつぎつぎとそれ誤れる方針にみちびかれた運動に献身するにいたった原因はなにか、ということである。その点で、新興教育研究所の運動が党フラクションの引きまわしではなくて自ら党の方針に接近していったとの尾崎氏の指摘は重要なのだが、そのところをもう少し掘りさげて展開していただきたかった。

ともあれ、本書の意義は、正しいと観念された誤れる指導とそれに従属的に結びつけられた運動の不毛性の歴史的検証という点にあるだろう。「不平の鳴」は反体制運動の指導にたいしてもむけられねばならないのである。

(狭間直樹)



山下正男『思想の中の数学的構造』

(B6、248頁、現代数学社)

本書は、古代から現代にいたる西欧や中国の、思想の世界と数学の世界とのたがいの交渉をいたものである。このふたつの世界は、その目的とするところと表現法においてしばしばことなるとしても、多くの密な関係を保ってきたはずであることは、

だれもが考えるところである。また、ピュタゴラスやデカルト、ライプニッツなど、このようなふたつの領域を別々にもうけてその思考を把握しようとすることじたい不自然と思われる人物も多いことから、本書のタイトルをみて、ひとはさしたる魅力を感じないかもしれない。

しかし、新カント派や現象学派が哲学者と数学者の活動領域を峻別していらい、およそふたつの世界の距離が遠ざかる一方であったと考える著者は、一九四九年の、レヴィー・ストロースの『親族の基本構造』の

なかで発表された、アンドレ・ウェイユの群論を用いた親族構造の解明をもって、ヨーロッパ思想界はその「正統的な流れ」である数学尊重の立場に復帰したと強調される。

本書は三つの部分からなっている。第一部は、ウェイユの方法にならない、現代数学を用いていくつかの思想の数学的構造を解明しようとする。とくに第三章「人文科学における群論の使用」では、レヴィー・ストロースやピアジェのように意識的にクラインの四元群をもちいた例を解説するとともに、易やアリストテレスや、西田幾多郎などの論理のなかにひそんでいた群論的な展開を指摘する。末尾で、弁証法が群論ではあつかえぬことを示すことで、ヘーゲル、マルクスの思考と、構造主義のちがいがあざやかに論じられている。

第二部では、数学と思想の構造的共通性と題して、解析学とヘーゲル哲学、複式簿記法と各種宗教の救済観などが対置され、第三部では、あれこれの社会イメージが、数学理論の形成にいかにかかわっているかについて、いくつかの論考が示されている。

ドダイ、論理の整合性に強い関心をもっていた思想家たちの書いたものを、数学的に解明しようとする本は睡魔をさそいがちであるが、本書の論考のなかでは、幾人かの思想家がもちいたキイ・ワードの意味が、それぞれの思想の数学的構造と対置されることで、より深く納得しようという成功例に出くわした。著者にこの点を話したら、「そやね、レントゲン写真みたいなんもんです」との返事。

全体として、この書からうける印象は、人類が現実とのつきあいにおいてもちいてきた数理的思考のパラエティは案外かぎられたものであるというところである。このことについては、いくつかの理由が推定される。もし分析の道具に原因があるとすれば、現代までの数学史の展開のしかたそのものが多様でなかったためか、あるいは著者自身が興味をもたれる数学の領域が限定されたも

のであるためか。もし分析の対象に原因があるとするれば、思想家といわれる、肉体労働から解放された特権的人間が、自己や社会や全宇宙をひとりじめにとりこんで論理で納得しようとするためたあかつきには、だいたいこういうパラエティのところにおちつくものなのか、如何。

なお、最後の章「集合論とアトミズム」において、「原子論は個人の析出していない非個人主義的社会では生まれえない」として、中国に原子論のないことを説明し、

多田道太郎『本棚の風景』

文学を説明することはしらじらしい。それが他人の文学について平気でできるためには、きまじめで優しくなければならぬ。

この本は、作家解説などとして、さまざまな場所にいちど発表されたことのある文章の集成である。選録の基準は「読書論」ということだが、「文学の」と限定しても

原子論の「もっとも尖鋭な形態である」集合論を、「ヨーロッパ的思考方法をもっとも鮮やかに代表するものである」とされてゐる点は、単純化がすぎはしないか。近代のヨーロッパ社会における「個の析出」ということは、かねて多くの知識人が夢想したが、ごく限られた例は別として、ドミナントな現実としては、さほどではなかったと思われるのは、評者の知見がかたよっているためか。

(横山俊夫)

(B6版、238頁、潮出版社)

かまわない。だから、個々の文章を書いてゐるとき、多田氏はずいぶんまじめであつたはずである。

「なかなかむつかしい小説である」

「私は二度、三度よみなおして、やっと輪郭をつかんだというありさま」

「文学としての評価は年をおうて定まっ

ていった。しかし、なぜ、どこが優れているのか。その分析は十分でなかった。」

『歳月』『風流使者』『大菩薩峠』へのこういったことは、読書にあたっての多田氏の構えをしめす。自分の読みにについての自信をしめす。作品を読むことにこだわらず、きまじめになればこそこういう言葉がでてくる。その読みとった結果を文章にあらわし、読者につたえようとするときの多田氏の姿勢は、書中の表現をかりながら言えば、愛想と親切とセンサクである。やはりまじめである。教える姿勢である。

ひとつのありかたにはちがいない。わたしも、いくつかの未知の作品を読んでみたい、という気にさせられたのだから。ただ、個人の好みとして言うならば、好きでもない女からしきりに話しかけられ、てきぱきと親身に行き届いた世話をやかれ、かと言って逃げるに逃げられず往生しているときのようなそんな心持が読んでいる間じゅうしつづけていた。

わたくしはもとと多田氏の文章がきらいである。今回も、抵抗を感じながら読みはじめつつ、いつか読みおわっていた。名文だからなのであろう。

全十七篇。書齋論一篇、「まえがき」「あとがき」論一篇、ベストセラー論一篇、題論一篇。作家、作品論十二篇にあつかわれているのは松本清張、野間宏、宇野浩二、司馬遼太郎、山本周五郎、五味康祐、水上勉、中里介山、井伏鱒二、富岡多恵子、梶井基次郎、田宮虎彦。あとがき一篇。

(平田昌司)

おくりもの

。平岡武夫名誉教授は勲三等に叙され旭日中綬章を授けられた。(五六年十一月三日)。

計 報

。木村英一元所員(一九四四年五月～一九四九年八月)は、十一月一日逝去された。

外国人研究員

。Lederose-Croissant, Doris & イデルベルク大学芸術史研究所私講師
日本・中国・西洋芸術の比較社会的研究
五六年八月一日～五七年三月三十一日

招へい外国人学者

。吉川宗男 ハワイ大学文理学部助教授

「住居における聖なる空間の比較研究」及び日米比較文化に関する研究

(多田教授)

五六年一月～二月

。Teboul, Michel フランス国立科学研究所

センター研究員

中国天文学の数学的研究 (山田教授)

五六年一月～五七年九月

外国人共同研究者

。Knaul, Livia ボン大学院生

中国宗教思想史に関する研究及び共同研究参加

期間 五六年四月～五七年三月

外国人研修員

。Kraft, L. Kenneth プリンストン大学院生

大燈師と臨済宗の源泉

五六年一月～二月 指導教官 柳田教授

施超倫 広州外国語学院助手

明治維新における武士階級の動向

五六年四月～五七年三月 指導教官 飛鳥井教授

。Leon, Cecile パリ第七大学院生

李商隱の詩 特に李商隱の七言律詩について

五六年四月～五七年三月

。Gebauer, Wulf-Christian

戦後日本の技術史 指導教官 吉田教授

五六年四月～五七年三月

。Fogel, Joshua コロンビア大学東洋部門

助手

中江丑吉の研究 指導教官 竹内教授

五六年六月～七月

。Bernard, Faure パリ第三大学院生

『楞伽師資記』とその背景

五六年六月～五七年六月 指導教官 柳田教授

。Smith, Paul J. ペンシルバニア大学院生

宋代の茶馬貿易の研究 指導教官 梅原教授

五六年九月～五七年八月

。犬丸和雄 ヴェネツィア大学講師

海外における日本人(インターカルチュアルな状況での行動研究)

五六年九月～一〇月 指導教官 谷泰助教授

黄仁坤

中国古典の再評価と現代語訳の問題

五六年九月～五七年八月 指導教官 竹内教授

。Crab, Stephen John 南京大学研究員

中国における近代思想の受容

五六年九月～五七年八月 指導教官 竹内教授

。Barné, Germaine R.

日本近代思想史 指導教官 竹内教授

五六年一月～五七年一〇月

中国の貴族制社会

——中国貴族社会の研究班——

こんなテーマをかけた研究班が発足して、やがて一年になろうとする。ずいぶん前から、貴族制社会という言葉は私の頭にこびりついて離れない。長い中国史の中で、中世という時代を設定するならば、こういう言葉で表現するしかないような社会が、どのようにして形成され、さまざまな変容の過程を経て、最終的に崩壊してゆくのか、その全体の姿をはっきりさせる以外に手はないと思うからであり、牛歩のごときのろさながら、六朝時代の貴族制社会をテーマにして、個人研究を進めてきたのもそのためであった。しかし、ふと気がつくと、在職期間はすでに余命いくばくもない状態である。ところが、六朝に続く隋唐帝国の時代を貴族制社会の一環としてどう把握すべきかの見当が、私にはまだついていないのである。これは一つ、同学同志の協力を得て、共同研究の場で鞭撻してもらえない、というのが班発足当時の私の気持であった。幸いに谷川道雄氏をはじめ、多数の参加者を得て、本館四〇一号会議室は毎回満員の盛況である。初年度は「貴族制社会」というテーマにあまりこだわらずに、

班員各自が自由に研究発表を行なうことにした。対象とする時代は、六朝隋唐だけでなく、先には秦漢からそれ以前にも遡り、後には宋代にも及ぶこともあり、政治・社会の問題だけでなく、思想・宗教・芸術・文学に関する発表も行なわれた。討論もかなり活発で「勉強になります」という年賀状も何通かもらって多少気をよくしているところだが、それにはお世辞も少しは入っているかもしれない。

私は最初に日本やヨーロッパの中世封建社会との比較や、六朝隋唐期における封建的要素の重視を提案したが、その後の班員諸兄の発表は、もっぱら中国固有の諸相を説明する方向で一貫し、封建制のホの字も出てこない。封建制概念の曖昧さにもよるが、そんな古びた言葉はしばらく措いて、まず中国の特殊性を追求すべきだということだろう。しかし比較の視座はもちつづける方がよいと思っている。

これらの発表や討論を通して、共通の問題関心が煮つまり、ある方向への掘り下げに集中できることを期待しているのだが、さて期待どおりに行くかどうか、第二年度を目前にひかえて頭の痛いところである。

(川勝義雄)

七年目

——ボードレール研究班——

『悪の花』（という表記もこの班から始まったのだが）第二版の全作品に詳細な註釈をくわえることを目的として、班が活動を開始したのは五〇年四月だから今年で七年目に入ることになる。日頃は悠揚迫らぬメンバー諸氏にもこの息の長さがだいぶ気になってきたようで、予定表を作るたびに嘆息がもれ、全部終ったらまた一から始めようなどという冗談もでている。

ペースはともかくとして作業は着実に進んでおり、現在までに『憂鬱と理想』八五篇および関連する数篇の訳註を終えた。先だっては河盛好蔵氏によって雑誌『學燈』で紹介され、「これが完成した時には、世界の学界に誇ることのできる『悪の華』の全訳になるにちがいない」とほめていただいた。抜刷を熱心に求めてこられる外国の研究者もいる。

研究会の性質上、なにかひとつの話題を選んで簡潔に書き留めることは難しい。筆者が今さらながら感じ入っているのは、詩を集団で読むこと自体のすばらしさである。メンバー各自の思い入れが並び立ち、衝突しあって、多義的な詩句の意味のからまりをほぐして

いくプロセスに、いつも胸をおどらされている。多田教授はたしか「相互主観性」ということばで集団のよさを説明された。

繰り返し現われるテーマを独自に検討する時間を多くもった上で、もう一度詩句にもどればさらに面白いのだけれど、こちらは希望どおりにはいっていない。

七年たつうちに註釈のまとめかたもかなり変った。始めは詩行ごとの註が中心になっていたのに対し、最近では一篇の詩の流れと全体のとらえかたのほうに力点が移っている。現在の懸案は、資料を網羅して資料的な価値に重きをおく方向と、読みごたえのある評釈の完成をめざす方向の調整をはかることである。どちらにも相当の根拠があり、しかも両立させるのは容易でない。研究史の長い古典の註釈には付きものの悩みである。

また、女性をうたった数の多い詩篇を、いくつかに区分してあつかうための作業上の方便として、対象だとされる恋人ごとに分ける従来の方法を踏襲したが、この分類法については、当然のことながら班内にも疑問の声がある。詩集全体の構成を分析する段階にたつたとき、改めて考えてみる必要があるだろう。

（湯浅康正）

三年間をふりかえって

軍部の政治史的研究班

わが研究班が「軍部の政治史的研究」というテーマに取り組み始めてから、はや三年が過ぎた。ひとくちに軍部・軍隊の研究といっても、じつにいろいろな方向からのアプローチが可能なのだが、この三年間を振り返ってみると、わが班としてはおおよそ次に述べる三つの問題に焦点をあわせて研究を進めてきたといえる。

まずその第一は、建軍期の諸問題の解明である。日本における近代軍隊の形成過程は、一八七一年の御親兵・鎮台設置を起点とし、八〇年代末に至ってほぼ一応の完成をみたと考えられる。形成期における最大の問題点が、新しく創出された徴兵制軍隊の性格規定如何にあることはいうまでもないが、この時期についてはそのほかに事実関係で未だよくわからない事柄が多いという特徴がある。とりわけ明治初めの草創期についてはとくにそうであるし、また徴兵制度にしても、その実態は必ずしもよくわかっていないわけではない。こういった不明な点を少しでも埋めていくというのが、今度の共同研究のひとつの方向性である。

第二は、植民地（戦時の占領地等も含む）における軍の存在と役割の解明である。近代日本の政治史において軍部は常に主役を演じ続けてきたが、それはひとえに軍部がほぼ一貫して帝国主義政策の領導者たる地

位を維持しえたからであった。軍部をしてその地位に留まらしめた要因はいくつかあるだろうが、なかでも重要なのは植民地において極めて大きな権力を掌握していたということであろう。その意味では、植民地と軍の關係の解明こそ軍部研究の核心をなす作業といってもいいすぎではないのであるが、ここではとりあえず、植民地における軍部の権力あるいは植民地における広義の「軍政」が次の二つの側面から成り立っていることを指摘するにとどめたい。

第一は、奪取獲得した植民地の維持・経営について軍部がきわめて重要な役割をはたしているという側面である。第二の側面は、既得支配地での権力に依拠して、軍部独自の外政活動を展開しえたこと、すなわち既存植民地を策源地として、絶えずその外にむかって覇権の拡張を求める策動を行いつつ続けたということである。

第三の問題は、軍および軍部に対するイメージの研究である。これはただだんに軍の外部の集団が軍に対してどのようなイメージを抱いたかという研究にとどまらず、逆に軍部がその外部に対して軍についてどのようなイメージを抱かせようとしたのかという問題、すなわちメッセージの「送り手」∨としての軍部の研究をも含んでいる。具体的には、新聞論調や教科書に現われた軍のイメージの研究や軍部の対大衆宣伝活動の分析などを行なっている。以上述べた諸問題について、具体的にどのような研究成果を得たかは、漸次明らかにされるであろう。

（永井 和）

旆

スイスのフランス語

御 牧 克 己

スイスはドイツ語、フランス語、イタリア語、ロマンス語を話す夫々四つの地域から成るが、ローザンヌはフランス語圏内、レマン湖畔にある小さな田舎町である。坂の多い点を除けば、静かな丁度京都に似た感じの町である。ただ人口約一四万と京都の十分の一であることを見ても、また、そもそもスイス全体が日本の四国くらいの大きさであることを見ても当然であるが、その大きさは比べものにならず、都心は端から端まで歩いてもせいぜい一時間くらいのものである。主な交通機関はトロリーバス。京都にも子供の頃四条大宮と西院の間をトロリーバスが走っていたのを懐しく思い出した。

フランスからスイスフランス語圏へ入ると先ず最初に気づくことはフランス語のアクセントと語彙の微妙な変化であろう。スイス人のフランス語のアクセントを紙面に表現することは不可能であるが、簡単に描写すると、

文末の単語の終りから二シラブル目（と思われるが）を妙に長く引っぱり、しかも少し上がり気味の歌う様な調子の何とも間延びしたアクセントである。本来フランス語に日本語のアクセントを持つ小生、この上スイスのアクセントが加わっては大変と、出来るだけ注意もした積りであるが、面白がって真似したりしている内にどうも少し移ってしまった様である。

語彙の変化は、数字の数え方が、フランス語のスワサント・デイス（70）、キャトゥル・ヴァン（80）、キャトゥル・ヴァン・デイス（90）が夫々、セプタント、ユイタント、ナナント（ベルギーでも同じ）となりむしろ論理的と思えるが、三食は、プティ・デジュネ、デジュネ、ディネが夫々デジュネ、ディネ、スッペ（souper）となり、古いフランス語の名残りを留めている。後者については単に語彙が異っているばかりでなくその内容まで変化していることを知らされる機会があった。同じアパートの三階に住んでいる友人宅へ晚餐（スッペ）に招待された時のことである。先ず通例に従ってスूपが出た。次にチーズとパンが出たので首をかしげてしまった。フランス人の友人宅に招待された時にはチーズとパンは食事の終りの方に出るのが常であったがここはスイスだから順序に少し変化があるのである。ここでチーズとパンを食べ過ぎて次の肉料理が食べられなくなっては大

変と、友人がしきりにすすめるのにもかかわらず、ごく控え目に頂き次に出るべき料理を待っていると、コーヒーが出てそれで仕舞いであつた。この時程、スッペという単語の語義を深く深く実感したことはない。しかし今更もう一度チーズを食わせてくれとも云えず、空腹をかかえて彼の宅を辞したのであつた。

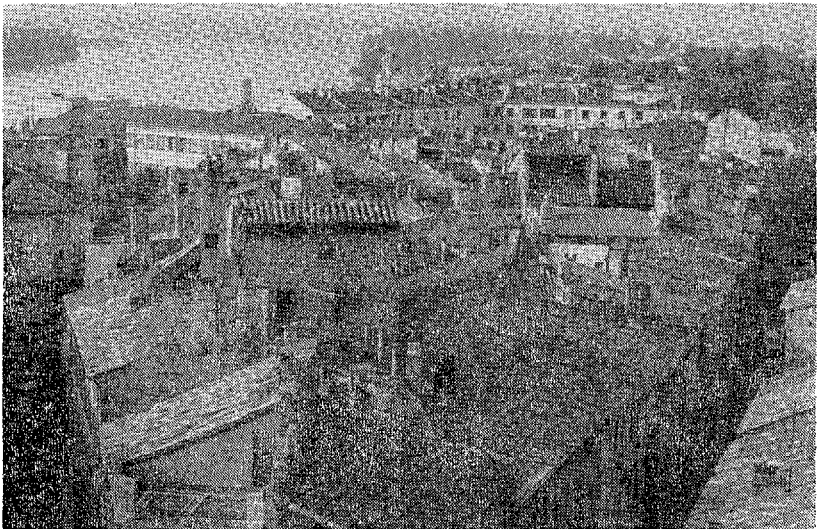
旅の楽しみ

田中峰雄

旅の楽しみは、なによりも「町」そのものをみることにある。こんな単純なことに、フランスの地方を旅してうかつにも初めて気がついた。

旅にみるものは多い。古い教会や古城・遺跡、さまざまな博物館、山河や田園。あるいは、居酒屋などこの土地の人とのふれあいを最上という人もあれば、地方料理のはしごなくして何の旅ぞという気にもなる。しかし、折々の町全体の姿をこそ、私はもっとも楽しみにして歩いたような気がする。

例えばアルル。この南仏の人口二万の町は、十二世紀・ロマネスクの眼をみはるような彫刻のある聖トロフィ



アルルの町とローヌ川

一々修道院の町として、ぜひもう一度訪れたいと思っているところである。その町の、ガロ・ロマンの遺跡として名高い円形競技場の最上階から町をながめたときの印象は強烈だった。赤茶けた屋根の下に展開する三〇五階建の棟と棟をつらねた家々、狭くまがりくねった石畳の道。この集落の密集ぶりは、かつての城壁跡を利用したと思われる広い外周道路の内側にみごとに限定され、対比鮮やかにその外側の田園地帯と対立している。たしかに、人口二万というフランスでは都会であるアルルの郊外には、近代的な団地群も望見できるものの、この対比は何だと思ってしまう。大通りひとつこえて、そこに「庭つき一戸建」でも建てればよさそうなものと。

例えばクリューニー。人口五千のこの町でも、一部しかないかつての大修道会の本山よりも、屋下りの狭い石畳を歩きながら、どこまでも静まりかえった、古びた閉鎖的な石の町並と、またもや外周道路一本で歴然と区切られた、ただ牧場と田地だけの世界との、鮮やかな対比のとりこになった。ディジョンといえは、人口五〇一〇万の「大都会」なのだが、町を横断するのに五分もあれば十分なのだ。

このような、都市と外界との明確な対立の妙は、残念ながら、フランス北部・北東部では期待すべくもない。

第二次大戦の戦火からの復興のなかで、中世以来の密集都市の面影が消えていったからだ。しかし、みごとに教会と城郭をもちながら、だらだらと、低く広くつづく町並みに焦だちながらカーンの町を歩いていたとき、ふと大戦時の写真展をみた。ドイツ軍の侵攻のとき無傷に近い形で占領されながら、皮肉にもその後の連合軍による奪還のとき、形状をとどめぬまでに破壊されたのだ。日本の空襲と異なり、大爆撃のあとにパンと毛布がふつてきたのだが、複雑な思いはきえなかった。

糧 票

富 谷 至

京都大学と西北大学との交換留学生として、私は九月初め、上海に向けて出発した。以後十一月中旬まで、わずか三ヶ月弱の西安滞在であったが、一ヶ所に時間をかけ、比較的自由な生活ができたことは、あらゆる意味で勉強になった。よほど自分の研究分野に熱心な人は別として、留学生の多くは、当地の現代の情況に、より興味をもつものであろう。そして私もその例にもれない。

西安での生活がはじまり、最初に私が一番知れたのは、「粮票」というものの実態であった。初めての休日、それまで学校の食堂で食事をしていたのだが、街に出て外食をしようとした時、食堂の服務員が言った。

「お前は粮票を持っているのか。持っていないければ菓子も買えないよ」。驚いた私は、粮票とは何故か、どうして使うのか、それが必要なのは何か、など熱心に、しかしたどたどしい中国語で聞きまくったわけである。私の語学力の不足は言うまでもないが、しかし説明する方も、もう一つわかっていないらしい。例を挙げるだけで総合的・抽象的に話してくれない。「肉を買う時、アイスキャンディーを買う時にはいらないが、餃子を食べる時にはいるよ」。しばらくして、やっと穀物を買う時には必要で、粮票を持っていなければ、パン・米・麺類は食べられないことが理解できた。

数日後、西北大学の助手と話をしていた時「給料が安いといっても、別に粮票を国からもらえるから食費は少なくて済むではないか」と私が言うのと、「お前はまだ分かってないらしい」と嘲笑されてしまった。一ヶ月程たち、私はようやく粮票とは、金に代るものではなく、ちょうど以前の日本での米穀通帳のようなもの、そしてそれが中国の計画経済の一端であると理解できたのである。

粮票のようなもの、つまり物品キップはその他いろいろある。タバコキップ、服地キップ、自転車キップ等々。

ある意味では計画経済下ではあたりまえ、現に以前日本にも同類のものがあつたわけだが、恥ずかしながら戦後世代の私には、すぐにはわからなかったのである。又々、今日の若い者は……と言われそうである。

計画経済は、物品のみならず人間にも適用されている。「生子票」、子供を産む為のキップである。もちろん一枚しかもらえない。ただ、この生子票は、男性に与えられるのか、女性に与えられるのか、ついにわからなかった。粮票、香烟票は私も中国の友人から分けてもらったが、残念ながら生子票だけは分けてもらえなかった。

インカの都で

羽賀 祥二

昨年の九月十三日から約二週間、ペルーを訪れる機会をえた。ペルー・カトリック大学が日本史の教科書を作成することになり、その仕事に参加させてもらったおかげである。大学の担当者との打ち合わせのほかに、リマ市内やクスコ、そしてリマの六百キロ北にある砂漠のなかの町、トルヒーヨなどを見てまわることができた。

九月十三日の早朝、三十時間ほどかかってリマに着いたとき、ちょうど冬が終わろうという季節で、低く厚い雲におおわれて、肌寒い気候であった。しかし、翌日アンデスを越えて、三千四百メートルの高地にあるクスコへ入ると、ぬけるような青空と太陽のかがやきに目を奪われるばかりであった。

クスコにわれわれは三日間滞在したのだが、そのあいだ市内の太陽神殿の遺跡やスペイン時代の数多くの教会、また近郊のインカ遺跡をひととおり見てまわった。かつてなんども遺跡の写真を見たことはあるが、やはり写真にはおさまりきれない風景と、その地独特の匂いのなかに包みこまれている遺跡群のなかで、その巨大さと緻密さに驚かざるをえなかった。まわりを四千メートルの山々にかこまれた遺跡までどのようにこの巨石を運んできたのか、ガイドの人からいかにもインカ人がそうしたかのような説明を聞いても、とても信じられるわけではない。クスコでの三日目、われわれはインカ帝国の最後の都市、マチュピチュの遺跡を訪れるため、朝七時の観光列車に乗り、約四時間半かかってアマゾンのジャングルへ向っていった。クスコのあたりは日干しレンガで作られた家と土地との区別がつかないほど赤ちゃけた色ばかりで、ところどころにユーカリの木が緑をそえている風景であったが、列車がアマゾンの源流ウルバンバ川に沿っ

て低い土地へ下りてゆくにしがって、熱帯性の植物を車窓から見ることができた。そうしたなかに全く孤立した小さなわらぶきの家が点在していた。そしてある家から少女と犬が列車をみに、走りよってきたのが印象的であった。マチュピチュの遺跡、まわり三方を四百メートルもある絶壁にかこまれ天然の要害をなす遺跡のなか、精巧な石造りの神殿跡や階段畑を見てまわるなかで、自然と同化して生きつづけ、一瞬のうちに滅亡していったインカ帝国の不思議さに魅せられた。

感銘をうけた本

・浅田 彰

ドミニック・フエルナンデス『ボルボリーノ』

(早川書房)

山田 稔『コーマルタン界限』

(河出書房)

森 毅『ものぐさ数学のすすめ』

(青土社)

講演会

一〇月九日

パリ第一大学教授

フランス革命研究の動向

於 本館二階大会議室

アルベール・ソブール氏

一二月三日

於本館二階大會議室

ノースウェスタン大学名誉教授

エドワード・T・ホール氏

文化における文脈の非明示性の諸相

―異文化間交渉での諸問題―

お客さま

五六年六月一二日

中華人民共和国南京博物院展隨展組

南京博物院保管部主任

南京博物院陳列設計員

南京博物院外事弁公室

中国国際旅行社

七月一八日

韓国精神文化研究院社会研究室長

七月三一日

中国社会科学院歴史研究所副所長

中国人民大学歴史系副主任

中国社会科学院外事局幹部

九月一一日

中国外交部第一アジア局副局長

同

九月一六日

中国社会科学院語言研究所

同

宋伯胤氏	徐湖平氏	顧志華氏	姜信杓氏	熊德基氏	沙知氏	趙玉洲氏	張德維氏	胡崗氏	熊正輝氏	劉堅氏
------	------	------	------	------	-----	------	------	-----	------	-----

九月一六日

Lecturer in Asian Law School of Oriental &

African Studies, University of London 大阪大学

法学部(文部省客員教授)

Paul H. Chen (陳恒昭) 氏

一〇月五日

中国社会科学院民族研究所副研究員

鄧銳齡氏

一〇月九日―十二月二九日

西北大学歴史系教授兼主任

張豈之氏

京都大学外国人特別招聘教授として来日、共同研究

「明代の政治と社会」に参加した。

一〇月九日

ソ連科学アカデミー極東研究所

ボロンツォフ氏

中国をめぐる国際情勢につき竹内教授と意見交換

一〇月二八日

中国科学院自然科学研究所副研究員

杜石然氏

中国科学技術史に関する若干の問題―報告ならびに懇

談―

一〇月三〇日

中華人民共和国黒龍江省大学教育考察団

団長 黒龍江省人民政府文教弁公室副主任

楊輝氏

黒龍江省高等教育研究会主任

楊輝氏

副団長 ハルビン師範大学校務委員会主任

陸輝氏

黒龍江省高等教育研究会顧問

張立信氏

黒龍江省高等教育研究会顧問 張立信氏

黒龍江大学校長・哲学教授 鄒 宝 驥氏
所長および尾崎教授、平田助手が応対して双方の研究
情況等について情報交換。文献センター書庫を見学。

十一月九日

中華人民共和国教育部

Deputy Director Planning Department,

Ministry of Education

Mr. Shang Zhi

Chief of the Director's Office

Mr. Wang Xian-ming

Educator and Staff Member, Department of
Higher Education No. 1 Mr. Chen Shao-chou

文献センター見学。

十一月二十四日

中国社会科学院代表团

团长 中国社会科学院副院长

張 友 漁氏

副团长 中国社会科学院副秘书长

楊 人 克氏

团员 浙江省社会科学院研究所所长

朱 人 俊氏

湖北省社会科学院副院长

密 加 凡氏

陕西省社会科学院副院长

錢 丹 輝氏

天津社会科学院副院长

段 鎮 坤氏

江蘇省社会科学院副院长

薛 家 驥氏

黒龍江省社会科学院副院长

高 家 騫氏

中国社会科学院外事局处长

張 国 維氏

中国社会科学院世界经济、政治研究所研究者

凌 星 光氏

中国社会科学院法学研究所研究者

王 保 樹氏

通 訳 中国社会科学院情報研究所研究実習員

何 培 忠氏

十一月二十四日〜十二月四日

ソ連科学アカデミー東洋学研究所

デリューシン氏

研究所の圖書を閲覧、研究活動をおこない竹内教授と
意見を交換。

十一月二十七日

中国社会科学院日本研究所訪日団

团长 日本研究所所长

何 方氏

团员 総合研究室主任

高 藤 地氏

“ 外交研究室研究員

評氏

通訳 総合研究室助理研究員

高 増 傑氏

十一月二十七日

中国社会科学院文学研究所代表团

团长 文学研究所副所长

許 覺 民氏

团员 “ 当代文学研究室主任

張 炯氏

“ “ 研究員

吳 曉 鈴氏

“ 外事局

解 莉 莉氏

古典文学、現代および当代文学の状況、日本における
研究状況につき相互に紹介し、意見を交換。村田、矢
淵、荒井、竹内そして田中謙二名誉教授が懇談に参加。
夜、関西在住の学者と夕食をともにして懇談。

書いたもの一覧

一九八一年六月〜一九八一年二月
(五十音順、●印は単行本)



・浅田 彰

翻訳・グ『貨幣の考古学(二)』(五) 現代思想 六一九月

書評・G・リレーゲン『経済学の神話』 読書新聞 七月六日号

ラカン 構造主義のリミットとしての現代思想

臨時増刊『総特集ラカン』 七月

コードなき時代の国家 現代思想 九月

構造とその外部(一) 現代思想 一一月

・荒井 健

翻訳・錢鍾書『包圍された塔』第四章 鷗風 一三三 九月

・上田 篤

宿場町・妻籠 諸君 六月

神戸ポートアイランド市民広場の設計における理念と空間のイメージ 建築画報 一五三三 六月

オールド・ファッショントウン・小矢部 諸君 七月

グスク・首里 諸君 八月

美術館・倉敷 諸君 九月

再録シナリオ・見えない神殿の物語―大阪の歴史 大阪春秋 三〇三 一〇月

月刊NIRA 一〇月

日本の住宅―その構造と機能 諸君 一〇月

街路樹・仙台 諸君 一〇月

●都市デザイン・理論と方法(共著)

壁画・藤沢 学芸出版社 一〇月

・上山 春平 諸君 一一月

●空海 朝日新聞社 九月

・宇佐 美齊 朝日新聞社 九月

生き方と書き方『吉田健一著作集』補巻一、月報 集英社 六月

書評・小田切秀雄編『啄木日記』 週間読書人 七月

解説・ユルスナール フランスを創った人々 週間読書人 七月

翻訳・イヴリマリ・アリユー『戦後詩を読む』 日仏技術 一〇月

ふらんす 白水社 六月〜一一月

・梅原 郁 白水社 一一月

●夢溪筆談3(訳注) 東洋文庫 四〇三 平凡社 一一月

・江村 治樹 平凡社 一一月

雲夢睡虎地出土秦律の性格をめぐって 東洋史研究 四〇巻一 六月

東京国立博物館保管 陳介祺旧蔵の封泥―とくにその形式と使用法について ミュージアム 三六四 七月

翻訳・龐樸『七十年代出土文物―その思想的、科学的意義』 みるず 二五五号 一〇・一一月

・小野 和子

書評・間野潜竜『明代文化史研究』仏教史学研究

二三巻 二号 三月

・川勝 義雄

翻訳・唐長孺「魏晉南北朝の客と部曲」東洋史研究

四〇巻 二号 九月

・桑山 正進

迦畢試国編年史料稿(上)

仏教芸術 一三七号 七月

翻訳・ガンダーラの化粧皿とパーキスタンにおけるヘレニズムの始まり(S・R・ダール) 仏教芸術 一三七号 七月

翻訳・タパルサルダールの仏教彫刻(M・タッディ・G・ヴェラルディ) 仏教芸術 一三八号 九月

インダス文明の宗教と印章 朝日歴史教室IV 八月

・佐々木 克 新修大津市史 第四巻 七月

大津県の誕生 茨城県史研究 四七号 八月

川瀬教文と「戊辰公務日記抄」 歴史と人物 九月

奥羽越列藩同盟敗北の要因 歴史公論 九月

「自由民権」における士族と政府

・竹内 実 マイタイム 六月

中国の帽子 京都新聞 六月一八日号

肝をつぶした話 京都新聞 八月八日号

中国のお化け 高知新聞 八月一二日号

中国—その体制と社会 京都新聞 九月三〇日号

左・「左」・右

虎の背・毛沢東の印象

文芸批判と魯迅記念

散歩する道

映画「長江」をみて

・多田 道太郎

北京の春その1

関西

北京の春その2

旅の思い出

日本語のカタログ

北京の春その3

日本語のカタログ

●本棚の風景

「無作法」料理でプロスト

カミカゼ舌修行てんまつ

潤色のない話

●ゼスチュア(共訳)

・田中 峰雄

談義近代日本関係洋書 (1) —(1) Ch. MacFarlane, Japan, 1852; (2) A. Steinmetz, Japan and Her People, 1859.

人文学報 四八号 (一九八〇年) 三月

Les Frères Mineurs dans le conflit universitaire parisien 1852-57. (Mémoire du D.E.A.) (一九八〇年) 九月

中世都市の貧民観(中村賢二郎編『前近代における都市と社会

B・B・L 九月

朝日新聞 一〇月一三日号

パイプ・ライン 一〇月

京都新聞 十一月一九日号

日本小説を読む会会報 二二六号 六月

エナジー対話 一八号 六月

日本小説を読む会会報 二二七号 七月

人文 二四号 七月

きんてつまいたうん 三六号 七月

日本小説を読む会会報 二三八号 九月

きんてつまいたうん 三七号 九月

潮出版社 一〇月

太陽 一〇月

太陽 一〇月

日本小説を読む会会報 二二九号 一〇月

日本ブリタニカ 十一月

『層』 人文研 (一九八〇年) 一〇月

ポワチエの夏期研修 読書会だより 二二号

(一九八〇年) 十一月

・谷 泰

羊への呼びかけ

民博通信 六月

リーダーは果してリーダーか

— ルーマニア放牧羊群の行動観察を通じて — アニマ 九月

南西ユーラシアの牧民の食文化

葵 秋号

ブタとケント — 再考 —

月刊みんぱく 一〇月

・礪 波 護

唐代における僧尼拜君親の断行と撤回

東洋史研究 四〇巻二号 九月

・狭間 直 樹

五四運動における日貨排斥について

現代中国学会会報 六月

・林 巳奈夫

古代中国の青銅器・玉器の名称と用法『新潮古代美術館10鬼神と人間の中国』 一一月

・平田 昌 司

『刊謬補缺切韻』的内部結構與五家韻書(一)

均社論叢一〇号 一〇月

梶戸幸次郎「林門」

均社論叢一〇号 一〇月

・福永 光 司

一切衆生と草木土石

佛教史学研究 二三巻二号 六月

— 佛性論の中国的展開 —

平安時代の道教学(上)(下)

陳舜臣『中国の歴史』(5)(6)研究ノート

平凡社 七・九月

聖徳太子の冠位十二階—徳と仁礼信義智の序列について—

図書 岩波書店 九月

『御製逍遙詠』解題 『天理図書館善本叢書』「漢籍之部」

西と東の哲学『野田又夫著作集』月報(2)

白水社 九月

日本文化と道教—天皇の思想と信仰を中心として—

日中学者會議「研究報告」

日本経済調査協議会 一〇月

老子と莊子『人物・中国の歴史』諸子百家の時代

集英社 一〇月

梅原猛さんと漢文『梅原猛著作集』月報(3)

集英社 一一月

・古屋 哲 夫

第一次西園寺内閣・第二次西園寺内閣・加藤(友)内閣

林茂・辻清明編『日本内閣史録』2

第二法規出版 八月

第一次近衛内閣『日本内閣史録』4

第一法規出版 八月

・前川 和 也

The Agricultural Texts of Ur III Lagash of the British Museum (I), *Acta Sumerologica*, No. 3 (University of Hiroshima), 1981.

・村田 裕 子

翻訳・艾蕪「海島にて」

訳林 二号 七月

翻訳・魯歌・衛華「魯迅と許広平——『西地書』の削除部分」

アジアクォーター 一三卷 四号 一〇月

・柳田 聖 山

今月のことば

花園 六月—十一月

禅語コーナー

同右 六月—十一月

語らざれば憂い無きに似たり

在家仏教 六月

一休さんの五百年忌

中外日報 七月三日号

夏雲奇峰多し

清泉3号 七月

栄西の天台宗

天台3号 八月

普化の鈴

誠信書房月報、新刊の眼 八月

●ダルマ『人類の知的遺産』16)

無仏の美

講談社 九月

新統灯史の系譜、叙の二

読売新聞 一〇月—四日号

「こころ」における東洋—漱石「三四郎」と「こころ」の世界

国文学 一〇月

禅と浄土(『図説日本仏教史』2)

法蔵館 一一月

●仏教入門(金岡秀友・田村芳朗と共著)

筑摩書房 一一月

・矢淵 孝 良

翻訳・陳邇冬「蘇東坡の酒」(『華味三昧』)

講談社 一〇月

・山下 正 男

梅、寒苦に耐えて清香を放つ 京五中創立四十周年記念誌

一〇月

・横山 俊 夫

ラーマン—Rahmān 世界伝記人名辞典

ホルプ・マグローヒル社 七月

前世紀末の日本の道学 季刊さろん日本文化 二号

七月

京都スタイル誕生 '80 京都デザイン会議・会議録

一一月

・吉田 光 邦

●京七宝文様集(編著)

淡交社 六月

●きもの

主婦の友社 七月

京の美

美しい日本6 九月

明・清の工芸

明清の美術と工芸 九月

竹工のながれ

竹の世界 一〇月

カプトとヨロイ

遊 一〇月

京のもののつくり

京のれん 一〇月

華甲の茶宴

茶の湯歳時記 一〇月

歴代展に寄せて

沈寿官家歴代展

正倉院への道(座談)

正倉院への道 一一月

Japanese handicraft

Konichiwa 六・八月

技術史の一断面

ぶっくれえっと 六・八・一〇月

耽書ささぎま

染織 六一—一二月